大阪府

泉州 普及センターだより

平成１７年３月３１日 発行 第３６号

大阪をたがやそう！

天敵を利用した水なすの減農薬栽培

水なすは生育期間が長く、病害虫も多いことから、農薬散布作業は農業者にとって大きな負担となっています。一方、害虫にはそれを捕食する虫（天敵）がいますが、農薬を散布することで天敵まで駆除してしまうこともあります。逆に、水なすほ場に天敵の生息しやすい条件を作ってやれば、その天敵の力で、農薬の使用回数を減らすことができます。そうしたことから、貝塚市や泉佐野市では、６名の農業者が「ソルゴーによる水なす囲い込み栽培」に取り組みました。

まず、水なすの定植時に、ほ場を囲い込むようにイネ科牧草のソルゴーをは種します。ソルゴーは２か月で人の背丈ほどになるため、強風から水なすを守る役割も兼ね備えています。ソルゴーにも害虫が発生しますが、水なすには影響がほとんどありません。ソルゴーの花粉やソルゴーに発生する害虫が餌になって、ハナカメムシなどの天敵が集まってきます。水なすにアザミウマ類が発生すると、ハナカメムシはアザミウマ類が好物なので、水なすに発生しているアザミウマ類を捕食します。

囲い込み栽培に取り組んだ農業者は、天敵の定着後はアザミウマ類の発生が抑制され、農薬の使用回数が３～４割削減できました。また、平成１６年はたびたび台風が襲来しましたが、ソルゴーの防風効果は高く、防風ネットのように切れることもなかったと好評でした。

せっかく集まった天敵を活かすために、対象害虫だけを駆除して天敵に影響の少ない選択性農薬の使用がポイントです。どんな種類の害虫や天敵がいるか、よく観察してから適切な農薬を選んで使用していきます。

ソルゴーを植えるため、水なすの栽培面積が減ってしまうのが難点ですが、ほ場面積に余裕のある方は、試す価値があります。詳しくは普及センターまでお問い合せください。

▲囲い込み栽培の様子：水なすとソルゴー（右）